

現代社会に生きる道元禅師（1200年-1253年）の教え*

田 中 泰 賢

- (1) 川端康成氏（ノーベル文学賞受賞者）の道元禅師
- (2) ユネスコ無形文化遺産に登録された「和食；日本人の伝統的な食文化」と道元禅師
- (3) 故スティーヴ・ジョブズ氏（米国、アップル創業者）の道元禅師
- (4) ゲイリー・スナイダー氏（米国、元大学教授、詩人）の道元禅師
- (5) 故ジュー・ケネット老師（英国、禅仏教尼僧）の道元禅師
- (6) ポール・ハラール師（北アイルランド出身、禅僧）及びマイケル・オキーフ師（アイルランド系米国人、俳優、禅僧、）の道元禅師

皆様おはようございます。行楽日和にもかかわらず愛知学院大学の公開講座においでくださいましてありがとうございます。道元禅師は本来の面目をめざす皆さまの様な方にあまねく坐禅をすすめておられます。最初に10分あまり一緒に坐禅をいたしましょう。

皆さまは椅子に座っておられますので足はそのままの状態です。

次に手の形と位置についてです。左の手の甲を右の手のひらの上に重ねます。左右の手の親指の先をそっと付けますと円相形になります。これを法界定印（ほっかいじょういん）と言います。親指の先がおへそあたりにきます。両手はゆったりと両足の上に置きます。

左に傾かず、右に傾かず、前に体を丸めず、後ろに反りかえらず正身端坐します。耳と肩、鼻とおへそが並びます。力まず、あごをひき、舌は上あごにつけ、口は閉じます。目は開きます。目は自然に開けています。呼吸は鼻で静かにします。

身体の姿勢が整いました。口を大きく開けて息をゆっくりと吐き出します。吸う時は口を閉じて鼻から吸います。次に体を左右に揺すります。背骨をリラックスさせます。7, 8回左右

に揺すったら坐禅に入ります。

坐禅が終わりました。まず両手の掌を上に向けて、両ひざの上に置きます。最初小さく、徐々に大きく体を左右に揺すります。道元禅師は坐禅を「ただこれ安楽の法門なり」と述べておられます。小倉玄照老師はこの安楽を「我欲を否定したところに生ずる安楽」と説明しています。（『新普勸坐禅儀講話』186頁）橋本恵光老師は「坐禅をしても戒が具わらないというのは、坐禅が坐禅でないからである。」と提唱されて、安楽の意味を誤解しないように注意をうながしています。（『普勸坐禅儀の話』200頁）内山興正老師は「われわれが生きてゆくうえで、すべてのシコリは、ただこの自分の小さいアタマのなかの、モノタリヨウの思いのなかで捲きおこされるだけのことです。しかしいま現在の生命が、現在の生命に成り切った姿（現成）のときには、あらゆる思いのシコリが結ばれる以前です。これが坐禅というものであり、ここにどっかり坐るのです。それゆえ坐禅は安楽の法門であり、」と述べています。（『宗教としての道元禅 普勸坐禅儀意解』60頁）

私が今掛けておりますのは、絡子（らくす）と言います。お袈裟（けさ）の一種です。「けさ」とはインドのサンスクリット語の音写です。壊色、赤褐色、柿渋色の意味です。もとインドの獵師などが着ていたぼろの衣をカシャーヤと呼んでいましたが、仏教はそれを取り入れたのであります。道元禅師はお袈裟が正伝の仏法の証であることを『正法眼蔵』の中で書き著しています。中国の唐の時代、即天武后が禅寺の修行僧が参禅聞法のため、諸方に師を求めて旅をしたり、また寺院において便所等の掃除、洗濯、燃料に使用する薪作りなどの仕事をする際、使用しやすいお袈裟として改善された「らくす」を与えてから普及したといわれています。

この絡子（らくす）は40年ほど前、お世話になった大樹寺（鳥取県）で指導を仰ぎながら手縫いで作ったものです。当時の大樹寺のご住職は鎌谷仙龍老師でありました。大樹寺は専門僧堂（曹洞宗で認可された雲水僧の修道の根本道場、当時）を開単（開創）しておりました。鎌谷老師はまた大本山永平寺の後堂（ごどう、修行僧を教育指導する役職）もつとめておられました。さらに愛知県津島市の海善寺尼僧堂（当時）や愛媛県新居浜市瑞応寺僧堂の眼蔵会等においての摂心会（せっしんえ、心をおさめて、散乱させないこと。一定の期間、集中的に坐禅を行う会）に出かけておられました。

鎌谷老師は私の絡子（らくす）の内側に「声色之外威儀」と書いて下さいました。これを「声色（しょうしき）の外（ほか）の威儀（いゐぎ）によるべし」と橋本恵光老師（鎌谷老師のお師匠）は読んでいます。橋本老師は「声色の外の威儀」は「仏祖正伝の坐禅の代名詞に用いられたもの、略。この坐禅の威徳には何物もおそれよりつかぬ」ものであると述べておられます。（276-277頁）

この「声色の外の威儀」という言葉は道元禅師の撰述された『普勸坐禅儀』の中にあります。道元禅師が『普勸坐禅儀』を書いたのは、「それまで日本において正しい坐禅の仕方を著した書物がなく、また参学者から坐禅儀を著してほしいとの要請があり、如浄禅師から受けた仏法を伝えるためにこの『普勸坐禅儀』を著す。」（伊藤秀憲他訳『道元禅師全集』第14巻、3-4頁）と述べています。

橋本老師及び小倉老師によれば、この言葉「声色の外の威儀」は中国の香巖智閑（きょうげんしかん、?-898、鄧州香巖寺襲燈大師）の言葉に由来しています。香巖は滄山靈祐禅師（771-853）の下で修行しておりました。博学であったといえます。ある日、滄山は香巖に「あなたが生れて幼児であった頃に戻って私に何か言ってほしい」と問われましたが、香巖は答えることができませんでした。香巖は悲しみ、涙をながして、今まで書き記した書物を全て焼き捨てて均州（湖北省）武当山に入り、慧忠国師（?-775）の旧庵のあとに庵住まいをしました。そして、ある日、道の掃除をしていた時、小石が竹にあたり、その響く音を聞いて香巖は大悟したといえます。その時の境地を香巖は次の詩に表現しました。

一撃忘所知 更不自修治
動搖楊古路 不墮梢然機
處處無蹤跡 聲色外威儀（下線は筆者）
諸方達道者 咸言上上機（大久保道舟編『道元禅師全集 下巻』、204頁）

この現代語訳は次の通りです。

「一撃の音で虚妄分別が消え去り、さらに修め求めるものはなくなった。
これからの行いはすべて古人の道に契い、しかも悟りに滞ることはない。
どこにも悟りの跡をとどめず、虚妄分別を離れた仏の行いとなる。（下線は筆者）
これをこそ、諸方にいる達道の人たちは、ことごとく無上の悟りと言っている。」
（粟谷良道編著『禅語録傍訳全書〔七〕正法眼蔵三百則Ⅰ』、70頁）

そのような歴史的に深い意味のある一句を鎌谷老師は私の絡子に書いて下さいました。ありがたいことです。当時のノートを見ますと、大樹寺僧堂で修行していた僧侶の中に鈴木聖道さんと言う方の名前があります。鈴木老師は現在、岡山県の洞松寺のご住職をしておられます。また僧堂（曹洞宗の僧侶を養成するために、修行僧を教育指導する学校）も開いています。鈴木老師を慕って、海外からも修行に励んでいる方々がいると聞いています。鈴木老師のあつい求道心にうたれます。

道元禪師は「弁道話」巻で「もし人が、たとえほんの一時でも体・口・ころの上に仏のしるしを体験して、仏の姿になりきって正身端坐（坐禪）をするならば、全宇宙の一切のものが仏の悟りの相となる。その故に諸仏諸祖は本来の面目を現成し、仏法の楽しみと喜びを増し、仏土を新たに莊嚴浄化するのである」（中村宗一他訳『全訳 正法眼蔵』「辨道話」巻四、286-287頁）と述べています。

今皆さまと坐禪をしました。これはお釈迦様のなされた坐禪でありますから、坐禪をした時、お釈迦様は過去の人ではなく、お釈迦様と共に坐禪をしたこととなります。道元禪師も同じです。道元禪師の伝えられた坐禪をしましたので、道元禪師と共に坐禪をしたこととなります。それを道元禪師は本来の面目と述べています。

鎌谷仙龍老師は「世の中全体を浄め向上させることが出来るのだというすばらしい大理想が確信されたとしたら、一座の坐禪も読経も、礼拝一つも合掌一つも、決してぐうたらな気の抜けた、いいころかげんなやり方はできないということになるわけです。」（『正法眼蔵身心学道』165頁）と述べています。

道元禪師が影響を与えている内外の人々についてその一端を紹介します。

- (1) 川端康成氏はノーベル文学賞受賞記念スピーチ「美しい日本の私」（於スウェーデン、1968年12月1日）の冒頭に道元禪師の和歌（「本来ノ面目」と題する歌）を掲げ、スピーチの最後に再び、道元禪師の「本来の面目」を述べています。道元禪師の「本来ノ面目」とは何でしょうか。

川端康成氏は1968（昭和43）年10月17日、日本人として初めてを受賞しています。因みにアジアではインドの詩人、タゴール氏に次いで二人目でした。しかしタゴール氏が受賞したのは1913（大正2）年ですので、アジアからノーベル文学賞が出たのは実に久々でありました。川端康成氏のスピーチをその時通訳したのはアメリカの日本文学研究者のエドワード・G・サイデンステッカー氏でありました。

サイデンステッカー氏も取り上げている川端康成の『文学自叙傳』の一節を引用します。

私は東方の古典、とりわけ佛典を、世界最大の文學と信じてゐる。私は經典を宗教的教訓としてでなく、文學的幻想としても尊んでいる。「東方の歌」と題する作品の構想を、私は15年も前から心に抱いてゐて、これを白鳥の歌としたいと思つてゐる。東方の古典の幻を私流に歌ふのである。書けずに死にゆくかもしれないが、書きたがつてゐるといふこ

とだけは、知ってもらひたいと思ふ。西洋の近代文學の洗禮を受け、自分でも真似ごとを試みたが、根が東洋人である私は、十五年も前から自分の行方を見失った時はなかったのである。（33：87-88）（下線は筆者）

仏典の定義は、中村元氏の『仏教語大辞典』では「仏教の聖典」、となっています。『日本国語大辞典』第11巻では『仏典』を『仏書』と同じと定義して、「仏教に関する書籍」としています。『学研漢和大辞典』では「1. 仏教の經典。2. 仏の教えを記した書物。3. 仏教に関することを記した書物」となっています。もちろん仏典は仏教の聖典です。と同時にあらゆる分野の宝庫でもあります。

川端康成氏は作家の立場から、仏典を人類の生んだ最高の文学と位置付けています。道元禪師の父、「久我通親（みちちか）の一族というのは、すべて風流歌人で、道元禪師が育ててもらった久我通具（みちとも）という人は「新古今集」の撰者であり、なかなかの文人でありました。道元禪師自身も古今集、新古今集、源氏物語を読んでいた。」（有福孝岳、108頁）と言います。川端氏が800年前の道元禪師の著した作品の中に素晴らしい文学性を見たのもうなずけます。

川端康成氏は1歳の時に父親が亡くなり、2歳の時に母親が亡くなっています。「この悲劇的な両親の死は、日本人は肉親の結合が強い点から見まして、二重の重要な意味があります。この事実は疑いもなく川端氏の人生観全体に影響を与えましたし、氏が後に仏教哲学の研究をする理由の一つにもなりました。」とスウェーデンアカデミー常任幹事アンダーシュ・エステルリング氏は川端康成氏に対するノーベル文学賞授与に際しての歓迎演説で述べています。（『武田勝彦記 日本文学研究資料双書川端康成』、293頁）道元禪師は3歳の時に父が亡くなり、8歳の時に母が亡くなっています。川端康成氏も道元禪師も共に幼い時に親を失っています。そういうことが両者を仏教の世界へと導く一つの縁になったのではないのでしょうか。

川端康成氏はその「美しい日本の私」のスピーチの冒頭に道元禪師の次の和歌をとりあげています。

春は花夏ほととぎす秋は月

冬雪さえて冷し（すずし）かりけり

道元禪師（1200年-53年）の「本来ノ面目」と題する歌

（『美しい日本の私』6頁）

川端康成氏はこのスピーチを次のように述べて閉じております。

道元の四季の歌も「本来ノ面目」と題されてをりますが、四季の美を歌ひながら、実は強く禅に通じたものでせう。(同書、36頁)

川端氏はこのスピーチの最初と最後に道元禅師の本来の面目という言葉を使っております。いかに道元禅師がこのスピーチにおいて重要であるかがうかがわれます。川端氏はこの道元禅師の歌をスピーチの中でも再度詠んでいます。道元禅師は48歳(1247年)の時、執権北条時頼(ときより)の招きを受けて鎌倉で法を説いています。そのおり、時頼の北の方から求められて詠んだ歌と言われています。道元禅師が亡くなる6年前です。

成河智明師¹⁾は「時間は過去から未来へと続いているが、ある時、ある時と取り上げない限り、時間はただの暗い次元でしかない。時間に名前を付けない限り時間をとらえることができない。個々人がある時、ある時の事物をとりだせば、その人にとって、ある時が光り輝く。」(『正法眼蔵 有時、14-15頁)と述べています。そうしますと、お釈迦様が人々に法を説かれたのもある時であり、お釈迦様が亡くなられたのもある時であり、達磨様が面壁9年の坐禅をされたのもある時であり、道元禅師が如浄禅師から法を継いだのもある時であります。そのある時を思い、供養し、修行する時、みなさまも全て光り輝くのであります。

皆さまもご先祖様がある時生れて、ある時亡くなられたことを記念して、お坊さんをおうちにお呼びして法事をする時、皆さまも輝き、全てが輝きます。花まつり、お盆、施食会、お彼岸、成道会、お涅槃会、等のお寺の行事にお参りされまして御本尊様を拝み、またご住職様のお話しを聞く時、皆さまも輝き、全てが輝くのです。またお墓参りをしてお墓を清掃して、ご先祖様に手を合わせる時、皆さまも輝き、全てが輝くのです。お家のお仏壇にお仏飯や、お茶を供えて供養する時、皆さまも輝き、全てが輝くのです。

それは「私の一念(おもい)が諸仏如来(みほとけたち)の智慧と相応(おなじ)であれば、すなわち時間的には、過去・現在・未来の三世が、現在の一瞬の心の中にあることを究めつくすことができるのです。空間的には十方のすべてが、いま現在の自分の一念(おもい)の中にあることを知ることができるのです。」(大野榮人『随嬉稱名成佛決義抄釋』50頁)²⁾ということになります。これが修行です。その時、ご先祖様のお陰で生かされていることに気がつきます。あらゆるもの全ての中で生かされていることを学びます。これが修行です。これが本来の面目ではないでしょうか。

成河智明老師は「時を考える場合、時は過ぎ去るものとすれば、過去に起きたことを現在から見ると、遠く離れてしまっていることになる。しかし、時は別の面がある。その事象の時々に自分がいたのであり、自分がおり時もあるとすればある時はそのまま現在のしゅんかんである。」(『正法眼蔵』有時、25頁)と興味深い視点から時について語っています。

「春は花、夏ほととぎす、秋は月、冬雪さえてすずしかりけり」という歌は道元禪師が800年前に歌ったものです。しかし成河智明老師の論点に立てば、今私達がこの歌を読む時にはそれは過去の歌ではなく、今この現在のことを歌っていることになります。春というある時には花がいっぱい咲き、夏というある時には鳥を始めとするあらゆる生き物が活動し、秋というある時には美しい月が輝き、冬というある時には雪が降る。そのある時、ある時すべてが輝いております。

ここでも時間に春、夏、秋、冬という名前があります。春にはたくさんの花が咲きそろいます。夏には様々な生き物が活動します。秋には月が示すように私達のいる太陽系、その太陽系がある銀河、さらにたくさんの銀河があり、この宇宙の広大さを知ります。冬には雪も降り、大自然の営みを感じます。私達がそう思う時、私達が輝き、全てが輝きます。そしてその時、それら全てがつながっており、私達はそのつながりの中で生かされていることを学びます。

道元禪師は「(本来の) 面目とは、たとえば、春は春のまま、春ながらの心の動きがあり、秋は秋のまま、秋ながらの心の動きがある。春は美しく、秋は淋しさを心に感ずるのである。」(中村他訳「唯仏与仏」巻四、401頁)と述べておられます。さらに「老梅樹は、冬であるのにたちまち一華二華を開き、三華四華五華と無数に開いてゆく。その清らかさを誇ることもなく、香りたかさを誇ることもない。」(中村他訳「梅花」巻三、22頁)と説いておられます。

成河智明老師は「各自が時間の中で関連する事物を並べて各自がこれらを見るのである。だから時間というのはそれぞれの人の時間ということになる。地上に多くの事物現象があり、たくさんの生物がおり、また一本の草、一個の事物もそれぞれこの地上にあることを学ぶべきである。このように考えるのが修行である。」(『正法眼蔵』有時、20頁)と論じておられます。

鎌谷仙龍老師は「本来の面目、ということを言いますが、何もかもそれ相応に本からちゃんと具わっている徳、それが道なのです。眼はよこ、鼻はたて、それが万物の道理であります。その解り切った道理にもかかわらず、道理が腹に入らないため、不足をいったり、恨んだり、ねたんだりします。坐禅がほんのちょっぴりの間でも出来たら、道を道にまかせたので、本来の面目がそのまま現れます。」(『正法眼蔵菩薩埵四攝法』36-37頁)と提唱しています。

さらに道元禪師は「自分というものをもって、事物事象の働きを習い究めようとするのが迷いであり、逆に、自然の働きがまさっていて、その中で自己が自己を習い究めるのが悟りである。」(成河智明、現成、7頁)と述べています。私達は大自然の中で、或いは大宇宙の無常の法則の中で生かされています。それを自分の思い通りにしようとする歪みが生じてしまいます。自分の思いを中心にする、大自然の摂理を見失ってしまいます。自分の思惑、自分の都合を中心にして考えることに道元禪師は注意をうながしています。春、夏、秋、冬という大自然の摂理を見失うことなく生きることの大切さを述べています。現代は情報化社会で便利です

が、大自然の実体とかけ離れた、私たちの自我が作り上げた妄想の世界に落ち込んでしまいかねない時代です。だからこそ、言葉の世界とは違う坐禅が重要になってきます。

自我とは周りの人にいろいろな役割を割りあてて、その通りに演じることを求めます。相手が自分の期待した通りに演じないと怒ったりします。自分が監督で世界は自分の思った通りに動いてほしいと思うのです。しかし世界というものはけっしてそのとおりに動いてくれません。ものごとすべてにおいて、自分勝手をせず、相手を生かす。そうすれば自分にも満足のいく世界が開けてきます。

私達が新幹線に乗っている時、一瞬目の前の風景が流れている錯覚を覚えることがあります。それは常に自分が動かないという誤解によります。実際は私達の乗っている新幹線が動いています。朝、太陽が出て、夜、太陽が沈みますが、しかし実際は地球が回転しながら太陽の周りを回っています。地球自体が自転の軸が少し傾いています。傾いているために、ある時期には太陽の光をよく受け、またある時期には太陽の光をあまり受けないという現象が起きます。太陽の光と熱を十分に受け取っている時を夏といい、反対に光も熱も少ししか受け取っていない時期を冬といいます。この夏と冬の間にあるのが春と秋です。夏が暑く、冬が寒いといった季節の変化は地球が傾いて太陽の周りを回っていることが原因です。

「薪が灰となった後、また薪とならないと同様に、人が死んで後、また生とはならない。このようであることを、生が死になると言わないのは、仏法で定められている決まりである。このことから不生というのである。また死が生にならないことも、お釈迦様の教えに定められている私の説法である。このことから不滅というのである。生も一時の位置である。死も一時の位置である。例えば、冬と春のようなものである。冬そのものが春そのものになると思わないし、春が夏になるとはいわないのである。」(成河智明、現成、15頁) そうしますと春³⁾も夏も秋も冬も大地自然はあるがままに存在していることに気がつきます。

(2) 何故道元禅師の『典座教訓(てんぞきょうくん)』は現代においても大切でありましょうか。

「和食文化」が平成25年12月、ユネスコ無形文化遺産に登録されました。長年にわたる日本人の創意工夫のたまものでありましょう。登録実現に努力された多くの方々に敬意を表したい。多くの仏教寺院の努力もまた和食の確立に貢献しており、その一つが精進料理という形に発展してきました。800年前、道元禅師が著した『典座教訓』もまた、日本の食文化に大きく貢献しています。この書で道元禅師は食事を担当する人の重要性を強調し、食事をつかさどる典座の役割が如何に大切な役職であるかについてまたその心構えについて懇切丁寧に述べてい

ます。「典座は人の命を預かり、「菩薩行」と呼ばれる大役であります。」（『精進 京の四季の味わいと禅の心』184頁）当時は食事を作ることや食事の心得が必ずしも修行において重視されていませんでした。つまり道元禅師の著したこの典座教訓は日本の食文化に於いて全く新しい世界観を展開したものといえましょう。

典座とは修行寺において食事をつかさどる非常に大切な役職であります。修行僧はみな典座を尊敬し、典座から学んでいきます。道元禅師は1237年、春、京都の深草、興聖寺で『典座教訓（てんぞきょうくん）』と呼ばれる書物を書いています。この興聖寺は道元禅師からすれば日本初の本格的な禅の修行道場として出発したのであります。道元禅師は『正法眼蔵』という今日、国内外でよく知られている書物を著しておられます。『正法眼蔵』は宗教的、哲学的に深遠な教えが説かれています。それに対して道元禅師の著した『永平清規』は修行僧達が修行の生活を実践できるように具体的に書いた書物です。その『永平清規』の最初におかれているのが『典座教訓』です。道元禅師は『典座教訓』の中で次の様に書いておられます。

大心とは、その心を大きな山のようにさせ、またその心を大きな海のようにさせる。一方にかたよったり、何ものにもくみしない心である。約40グラムほどの軽いものでも軽々しく扱わず、約19キロの重いものにもたいしても特別に大げさに取り扱ったりしない。春の風に誘われても、浮かれることなく、秋の景色を見てもことさらに物寂しい心を起こさない。春夏秋冬の四季の移り変わりも、これを自然のあるべき姿として、大きな眼で一つの景色の中に一緒にとらえる。（中村璋八・石川力山・中村信幸134-137頁、上田祖峯212-216頁、中根環堂192-196頁、内山興正232-233頁、藤井宗哲159-164頁参照）

この大心は最初に紹介しました、道元禅師の和歌「春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて涼しかりけり」のことであることがわかります。京都に以前曹洞宗の安泰寺というお寺がありました。このお寺は1977年ごろに兵庫県に移転しております。移転前のご住職は内山興正（1912-1998）老師でありました。内山老師は早稲田大学大学院修士修了後、宮崎カトリック神学校教師をしていました。1941年に沢木興道老師に就いて出家しています。その後、沢木興道老師と弟子の内山興正老師が安泰寺を再興しています。

その移転する前の1974年ごろ、私は安泰寺の摂心会に参加したことがあります。当時私は広島に住んでおまして、市内の禅昌寺という曹洞宗の土曜参禅会にかよっておりました。その参禅会に熱心に通っておられた瀬戸原行信という方がおられました。この方は安泰寺にも摂心に時々参加しておられました。私も一度行ってみたいと思い参加した次第です。それで広島から自分の坐蒲を持って京都の安泰寺に行きました。その摂心会ではセーターを着ていたこと

を思い出します。本堂に僧侶や一般の方、外国からの方々、合わせて四、五十人の参加者が五日間摂心を行いました。朝四時に起床して夜九時に開枕（就寝）するまで、坐禅と経行（きんひん）〔坐禅の合間に本堂内をゆっくり歩くこと〕を繰り返します。今思うと、その参加者の人数分の食事を朝、昼、晩と作ってくださった典座の方々に改めて感謝したい気持です。摂心ができましたのは食事を作って下さった典座和尚の方々のお陰です。因みに一週間の摂心会が終わった時、若い外国の人達が抱き合って喜んでいて姿を思い出します。

内山興正老師のお弟子さんたちは海外布教をしておられます。例えば奥村正博老師はアメリカのインディアナ州に三心寺を建立され、またサンフランシスコの曹洞宗北アメリカ開教センター長も務められております。また内山興正老師のお弟子さんに渡部耕法老師と言う方がおられ、その人のお弟子さんに藤田一照さんという方がおられます。藤田老師はアメリカのマサチューセッツ州ヴァレー禅堂に赴任され、曹洞宗国際センター長も務めておられます。

このように海外で布教するお弟子さんたちを育成した内山興正老師には典座教訓について一冊の本があります。これは宗務庁から毎月刊行されている「禅の友」に連載したものをまとめて1970（昭和45年）に出版されています。その題名がちょっと変わっていて『人生料理の本典座教訓に学ぶ』となっています。その書物で内山興正老師は次のように述べておられます。

『典座教訓』は料理をする役の本であり、一口にいえば料理の本だということができます。しかしそれはどこまでも宗教書です。いや、わたしの考えでは、古今無比の最高の宗教書だと信じています。というのはそれにはたしかに食事そのものの料理の仕方もかいてありますが、同時にあらゆるもの、あらゆる事柄、あらゆる人間を料理する態度が書いてあり、もっと根本的にいえば「自己自身の人生をいかに料理するか」を、具体的にかいたところの料理の本だからです。略。ではこの人生をわれわれは一体何によって料理するか—道元禅師の場合、それは坐禅です。道元禅師の坐禅の背後に仏教という宗教があり、仏教という宗教の背後には自己の人生が有るべき（24-25頁）

愛知専門尼僧堂堂長、青山俊董老師は国内の布教はもとより海外の各地を巡回布教されて、禅の海外展開に尽力されています。以前、カナダで禅の修行をしている女性のお坊さんが名古屋に来た時、ぜひ青山老師に会いたいという希望があり、忙しい日程のなかで青山老師のお寺に拝登して会っていただいたことがありました。このように青山老師は海外でもよく知られた僧侶であることがわかります。青山老師はこの典座教訓についてのご提唱の中で次のように語っています。

尼僧堂の改築に写経で協力して下さった方に、Hさんという六十歳を少しすぎたお婆ちゃんがいた。このお婆ちゃんは写経のご縁に会えたことの喜びを、一人胸にしまっておかず、その勤め先である競馬場で、馬券を売りながら、競馬に来る人ごとに、「お写経をしてごらんになりませんか。お写経のご縁にあずかせていただきますよね」と写経を勧め、たくさんの写経を尼僧堂に納めて下さった。私は深い感動と共にこのお婆ちゃんのお話を聞き、ひそかに私の思い違いを懺悔した。私は何となく先入観として、競馬や競輪などというところは、世間の吹きだまり、人々のひんしゆくを買うような人々の集まる場所、いわば泥田のような所と思い込んでいた。どこもお浄土、泥田の真ただ中にもみごとな大百連は咲くのであり、浄土、穢土は、場所ではなくて、住む人々がみずからつくり出してゆく世界なんだと、気づかせていただき、私の思い違いを懺悔したことであった。」（『道元禅師・典座教訓 すずやかに生きる』44頁）

青山老師の典座の職を説明する仕方はとてもわかりやすいですね。因みに青山老師の説明の中に大百連という言葉がありました。愛知学院大学の正門のすぐ近くにバス乗り場がありますね。そのバス乗り場にお手洗いの建物があります。その近くに蓮が大きな鉢に植わっております。中根環堂老師（『典座教訓現代講話』107-109頁）によりますと、東佐與子（ひがしきよこ 1892-1973）氏は道元禅師の『典座教訓』を大変推賞していたといいます。東佐與子氏は元日本女子大学の教授でありました。1925（大正14）年から日本政府留学生としてフランス、パリの料理学校、コルドン・ブルーに留学しています。東氏は次のように述べています。

私は長い間の実験によって、人類の食べ方が物質面に偏し、精神面を全然閑却している事を知った。（『世界人は如何に食べつつあるか』3頁）

この言葉は道元禅師の『典座教訓』の次の言葉に相当するでありましょう。

よく考えてみると、雑念を離れ、真心を打ち込んで食事を調える典座の仕事が、人格完成への仏道修行に他ならないからである。（上田祖峯訳、4頁）

また東氏の「心と手とで料理を作り」（3頁）は、道元禅師の「典座職にある者は、調理材料や調理器具などに絶えず心を注ぎ、心と物との区別なく、心と物と一体となって、調理の仕事に精魂真心をこめて精進し、修行しなければならない」（上田祖峯訳、51頁）に相当するでありましょう。更に東氏は「食物は宇宙霊の人類に對する愛の表現物である。略。道元禅師

が、草木如何でか眞如佛性ならざらむ」（草木は物質でなく佛であるの意）と申された所以である。」（『愛の料理集』24頁）と述べています。ここでは東氏は道元禅師の『正法眼蔵』「発無上心」巻から引用しています。

中村璋八氏達は元日本栄養士学会会長森川規矩氏（1906-1980）から依頼を受けて栄養士を対象として『給食倫理』（1977年）、続いて『作る心 食べる心』（1080年）出版しています。森川氏は「人間の生存は、生物界の共通する生きる権利を無視し、生命ある動植物を容赦なく殺戮し、彼らの保有する栄養素を人間の栄養に供するばかりでなく、更に大量に食物を廃棄している現今の日本の食習慣を省みるとき、食事を作る心、食べる心のある人間として許容できるものだろうか？「いただきます」「ごちそうさま」の清らかな心は、一切の罪状から栄養の感謝まで含めた、精神上の美しいものに受け取れるといえるかもしれないが、給食管理の日本の始祖、道元禅師は、給食の倫理を典座教訓等にまとめている。この道元の心を、私は日本栄養士の魂に新風を送るために、50余年一貫して説いてきた。」と述べています。（『作る心食べる心』推薦の言葉）

森川氏は『給食管理者たるわれわれ栄養士は、給食の倫理観に立って学理を背景とした給食経営学、給食経済学、給食工学を学び、さらに給食調理の科学的解明を目指して努力しなければならぬと思う。』（『給食倫理』編さんのことば）と述べています。また中村氏は「現代の人々は、ややもすると、「食」を単なる生理的欲求を満たす「物」と見做すのみで、その本質を見失い、また、それを調理する人に対しても、真の理解を示さず、調理する側も、自己の作業に対して矜持（きょうじ）することをしない。果してこれで良いのであろうか。このような考え方が、現代社会の種々の病根となっているのではなからうか。」（『給食倫理』序）と力説しています。服部敏良（としろう）氏は「現代人の感覚からみれば、飽食が健康に有害であり、いろいろな肉体的障害を起こすことをだれでもが知っている。しかし、二千年余の昔に説かれたとなると、われわれも驚かざるを得ない。お釈迦様はお経の随所にこうした飽食戒を説き、飽食の恐ろしさを、弟子に教えている。」（『釈迦の医学』81頁）と指摘しています。

(3) 何故スティーブ・ジョブズ氏（1955-2011）は道元禅師の教えに魅かれたのでしょうか。

ジョブズ氏は1974年（19歳）ゲーム・メーカーのアタリ社に夜勤エンジニアとして勤めています。インドへ探究の旅をする為に退社しています。旅費を捻出するためチーフ・エンジニアのアルコーンと交渉します。アルコーンは旅費を援助する条件としてヨーロッパで起きているアタリ社の規格のトラブルを解決することを条件にします。ジョブズ氏は見事に、その問題を解決します。インドで7カ月の旅を終えて帰国した時の印象は次の通りです。

僕にとっては、インドへ行った時より米国に戻ったときのほうが文化的ショックが大きかった。インドの田舎にいる人々は僕らのように知力で生きているのではなく、直観でいきている。そして彼らの直観は、ダントツで世界一というほどに発達している。直観はとってもパワフルなんだ。僕は、知力よりもパワフルだと思う。この認識は、僕の仕事に大きな影響を与えてきた。略。インドの田舎で7カ月を過ごしたおかげで、僕は、西洋世界と合理的思考の親和性も、そして西洋世界のおかしなところも見えるようになった。じっと座って観察すると、自分の心に落ち着きがないことがよくわかる。静めようとするともっと落ち着かなくなるんだけど、じっくりと時間をかければ落ち着かせ、とらえにくいものの声が聞けるようになる。このとき、直観が開く。物事がクリアに見え、現状が把握できるんだ。ゆったりした心で、いまこの瞬間が隅々まで知覚できるようになる。いままで見えなかったものが見えるようになる。これが修養であり、そのためには修行が必要だ。あのときから、僕は禅に大きな影響を受けるようになった。（ウォルター・アイザックソン『スティーブ・ジョブズ I』井口耕二訳、93-94頁）

アメリカに帰ったジョブズ達は鈴木俊隆老師から紹介を受けた千野弘文（乙川弘文）老師（1938-2002）から禅の指導を受けます。雨が降っていた日には、そういう環境音を利用して坐禅に集中する方法を学んでいます。ジョブズ氏は毎日のように弘文老師の元へ通い、2～3カ月に一回はこもって坐禅する摂心会をおこなっていたようです。二人の信頼関係は厚く、17年後に弘文老師がジョブズ氏の結婚式を執り行っています。

鈴木俊隆老師が1967年にカリフォルニア州タサハラに建設した禅心寺（Zen Mountain Center Zenshinji）は、北米で初めての「叢林」、つまり集団で生活しながら坐禅修行を続けることの出来る修行道場として、今なお多くの修行者を集め、全米の参禅者達の拠り所となっていますし、タサハラ禅心寺の活動が軌道に乗り始めた1970年に著された「Zen Mind, Beginner's Mind」は、禅の実践に関する入門書として大きな反響を呼び、ベストセラーとなりました。その後、45か国語に翻訳され、世界的に禅の実践の捉え方を紹介する書として広まっているのです。（石井清純監修『禅と林檎 スティーブ・ジョブズという生き方』192-193頁）

鈴木老師は1959年、サンフランシスコの桑港寺の住持になっています。1961年近隣のユダヤ教の寺院を買い取り、発心寺（Beginner's Mind Temple）を創設しています。1970年から80年代、前角博雄老師がロサンゼルスとニューヨークに、片桐大忍老師がミネソタに禅センターを開設していきます。乙川弘文老師は鈴木俊隆師の依頼を受け、タサハラ禅心寺で修行者の指導にあたるためアメリカに来たのです。

スティーブ・ジョブズ氏は1986年に起こしたネクスト社では宗教指導者として乙川弘文老

師を招へいしています。乙川弘文老師は1938年、新潟県加茂市の曹洞宗、定光寺住職、乙川文竜の三男として生まれています。8歳の時、病気で師匠である父が亡くなります。耕泰寺の住職で加茂高校の英語教師をしていた知野孝英先生の養子になります。弘文老師はさきほどふれました沢木興道老師のもとで坐禅をしています。沢木老師が亡くなる1965年まで折にふれて沢木老師のもとを訪ねて坐禅の指導を受けています。

駒澤大学から京都大学大学院に進学した際には内山興正住職の安泰寺にも参禅していました。さらに永平寺で修行をしています。鈴木老師からロスアルトスのハイク禅堂の住職をまかされています。鈴木老師の亡きあと、その後を継いだリチャード・ベイカー師の要請を受け、サンフランシスコ禅センターを助けます。また新たに設立したサンタクルズ禅センターでの指導、スタンフォード大学での講義、ハイク禅堂近くのユースホテルでの坐禅会を行っています。1981年、ロスアルトス近くに観音堂、サンタクルズの山麓に慈光寺を建立します。ジョブズ氏はリード大学時代から仲間達とハイク禅堂、タサハラ禅センターにかよって乙川弘文老師から禅の指導を受けます。そういった過程においてジョブズ氏は道元禅師の禅を学んでいったと思われまふ。

- (4) アメリカのゲイリー・スナイダー氏は道元禅師の教えをどのようにとらえていったのでしょうか。ゲイリー・スナイダー氏は次の様に述べています。

「ある人は、例えばボブキャットの仏の領域においては「アヒンサー」の実践とは何を意味するのかと疑問に思うかもしれない。道元禅師は「龍は水を宮殿と見る」（『正法眼蔵』「山水経」）と言ったが、ボブキャットにとって森はエレガントな食堂（じぎどう）であり、そこではウズラに対し静かに感謝の偈を唱えながら、心の中で悪鬼や飢えた亡霊たちとウズラを分かち合っているかもしれないのだ。道元禅師は「仏とともに学ぶ者は、水を観察するときは人間の視点に縛れてはいけない」（『正法眼蔵』「山水経」巻）とのべている。それではウズラにとっては、それはどんな世界であろうか。私が私自身について知ることと言えば、次のことだけである一死に際し、私の死と苦悩は私自身のものであり、私の苦しみが私を倒した虎（または癌、あるいはなんであれ）のせいにするのを望まない。虎に対してはただ「私の肉体を無駄にしないでください」と頼みたい。そして彼女（虎）と一緒に唸り声をあげてみたいと思う。」（『惑星の未来を想像するものたちへ』97頁）

ここでゲイリー・スナイダー氏は道元禅師の「山水経」の言葉を引用しながら、私達が陥り

やすい一つの見方に偏する危険性に注意を促しています。これは道元禅師の世界観が現代社会の中で非常に重要であることを示しています。スナイダー氏は「青山は常に歩いている」という道元禅師の言葉を引用して、語り続けます。

道元禅師のいう山水とは、この地球の生成過程であり、存在そのもの、過程、本質、行為、不足であって、存在も非存在も、ともに含んだものである。山水は我々そのものであり、我々は山水そのものだ。階級もなく、平等もない。秘儀的でもなく、開放的でもない。天才もいなければ、のろまもない。野性もなければ、栽培もない。束縛されもしなければ、自由でもない。自然でもなければ、人工的でもない。それぞれが、まったく独自の、つかのまの個である。そして、すべての存在は、あらゆる形で関わりあっており、あらゆる形で相互に関わっているからこそ、独自の個なのだ。だから「青山」は台所へ歩いてゆき、店にも行く。」（『野性の実践』140-141頁）

スナイダー氏は早くから道元禅師を氏の著書等で取り上げています。一つは詩集 *Regarding Wave* (1967) において、次は重松宗育氏著 *A ZEN FOREST Saying of the Masters* (1981) におけるスナイダー氏による前書きの中で、三つ目はスナイダー氏のエッセー集 *The Practice of the Wild* (1990) で論じています。（田中泰賢『アメリカ現代詩の愛語』6-9頁）そして四つ目は彼の詩集 *Mountains and Rivers Without End* において道元禅師の『正法眼蔵』から引用しています。この詩集の“Canyon Wren”の中で「Dōgen, writing at midnight, / “mountains flow / water is the palace of the dragon / it does not flow away.”」（山は流れる。水は龍の宮殿であり、水は流れない）と書いています。これは「山水経」巻をスナイダー氏がまとめたものと思われます。スナイダー氏のまとめを補足するために道元禅師の『正法眼蔵』から抜粋引用してみました。「山は山になりきっており、水は水になりきっており、そのほかのなにものでもない。世界全体の立場から、青山の歩み、即ち自己の歩みを調べてみる必要がある。それがあらゆる時を超えて前へ進むばかりでなく、後へ退き歩み、歩み退くことを調べてみる必要がある。進歩も休まず、退歩もやすまない。進歩は退歩にそむかず、退歩は進歩にそむかない。このことを、山が流れるといい、流れるのは山であるというのである。われわれはしばらく、諸方の水をありのままに見ることを学ぶべきである。龍魚は水を宮殿とみる。人間はそれを水とみる。水はこのように、それぞれの立場によって、生かしたり殺したりされるのである。龍魚が水を宮殿と見るときには、ちょうど、人がこの世の宮殿を見るときのように、宮殿が流れるとは思わないであろう。われわれは、このようにして、対立した見方を超えることを学ばねばならない。自分が水と考えているものを、どの類もみな水として用いているに違いないと、愚かにひとりぎめして

はならない。」(中村宗一他訳「山水経」巻二、53-65頁抜粋)

スナイダー氏は1930年にアメリカのサンフランシスコで生まれています。1939年、9歳の時、シアトル美術館で中国絵画のコレクションを見て感銘を受けています。1953年、23歳の時、カリフォルニア大学バークレー校大学院で中国語、日本語を学んでいます。1956年、26歳の時、5月アメリカ第一禅協会から奨学金を得て、貨物船で神戸に来て、京都の相国寺で三浦一舟老師のもとで禅の修行を始めます。1957年、27歳の時、オイルタンカーの機関室の掃除係として働きながら、イタリア、トルコ、セイロン、ハワイなどをめぐる旅をします。29歳の時、1959年には、京都に戻り、大徳寺で小田雪窓老師のもとで禅の修行を再開します。1968年、38歳を迎え、アメリカに帰ります。1975年に詩集『亀の島』でピューリツァー賞を受賞します。1982年、52歳の時、坐禅堂「骨輪禅堂」を建設します。1986年、56歳の時、カリフォルニア大学デーヴィス校教授になり学問の分野でも高い評価を得ていきます。1998年、68歳の時、仏教伝道協会から「仏教伝道文化賞」を受賞しています。

(5) ジュー・ケネット老師(法雲慈友ケネット、1924-1996)は道元禅師から何を学び得たのでしょうか。

その一つは道元禅師の男女平等の教えでありましょう。道元禅師は『正法眼蔵』『礼拝得髓』巻で次のように語っておられます。

道を得ることは、男女の区別はない。男女ともに道を得るのである。ただ仏道の体験を重大視することだ。男女の性の違いを論じてはならない。これが仏道の最も根本的な法則である。(中村他訳、巻二、39頁)

道元禅師は更にこう述べています。

ただなすべきは、主人と客人の礼ばかりである。仏道を修行し、仏道を悟ったものは、たとえ7歳の女性であろうとも、釈尊の四種の弟子達(僧、尼、信士、信女)の指導者であり、衆生の慈父である。(中村他訳、巻二、40頁)

又この坐禅の行は、僧侶の外の男女も修行することができるでしょうかという質問に道元禅師は「辦道話」の巻で「仏法を会得するには、男女、貴賤の選別、身分の差別はしてはならない。」(中村他訳、巻四、308頁)と説いています。

更に坐禅辦道などの面倒なことをする必要があるのでしょかという質問に道元禅師は「仏道というものは自己他己との対立を越え、自分を無にして参学し修証するものである。」（中村他訳、巻四、312頁）と述べておられます。

ジュー・ケネット老師は英国、サセックス（イングランド南東部、イギリス海峡に面する地域）で生まれています。洗礼名は Peggy Teresa Nancy でした。仏教との出会いは父の書齋にあったエドウィン・アーノルドの詩作品『アジアの光』⁴⁾であったといひます。その後上座仏教を学んでいます。1954年、彼女はロンドン仏教協会の会員になり、仏教の世界に入っていきます。1960年、曹洞宗大本山総持寺貫首であった孤峰智璨禅師（1879-1967）が欧米を巡錫された時、ロンドンで彼女は孤峰禅師に巡り合うというご縁に恵まれました。1961年秋、マレーシアで仏教を学んだ後、来日します。1962年4月14日、孤峰智璨禅師の弟子になっています。孤峰禅師の遷化後、彼女はアメリカにシャスタ仏教僧院を創立し、英国に戻り、スロッセル仏教僧院を創設しています。

ジュー・ケネット老師の弟子の一人であった故ダイズイ・マックフィラミー師は論文「カルマ（業）とは何か」の中で道元禅師の『修証義』から引用しています。『修証義』は1890（明治23）年、道元禅師の『正法眼蔵』の中の語句をつづって編集された曹洞宗の安心の標準と在家教化のための新纂聖典です。

仏道と関係なく無駄に百歳までも生きているのは実に残念な日月である。悲しむべき肉体である。その中のたった一日でも、仏としての修行の生活を行ったならば、百歳の全生涯を修行によってとりかえすばかりでなく、生まれ変わる次の生の百歳をも悟りの生涯とすることができるのである。このように一日の命は尊い命であり、大切な体である。（田中泰賢訳「故ダイズイ・マックフィラミー師著「カルマ（業）とは何か」『愛知学院大学教養部紀要』第61巻第2号（2013）57-58頁」

このところは『正法眼蔵』「行持」上巻に述べられています。

- (6) ポール・ハラール師とマイケル・オキーフ老師は道元禅師の法を継ぐ僧侶として何をめざしているでしょうか。

道元禅師は「辨道話」の巻で「仏家には、教の殊劣を対論することなく、法の浅深をえらばず、ただし修行の真偽をしるべし。（真実の仏教は、その教えの優劣を論ずることではない。

したがってその浅深を差別比較することをしない。ただ修行が真実であるか否やを見究めることである)」(中村他訳、巻四、294頁)と述べています。セクトという狭い枠を超えて共に坐禅をすることです。

また道元禅師は「仏道」の巻で「仏正伝の大道を、ことさら禅宗と称するともがら、仏道は未夢間在なり(仏正伝の仏道を、ことさら禅宗と称している人々らは、真の仏道は夢にも見ることも聞くことも伝えることもない)」(中村訳、巻二、295-296頁)と述べています。このような道元禅師の大きな心にポール・ハラール師やマイケル・オキーフ師達は帰依しています。そしてそのような精神が現代社会の対立を鎮めるのに役立つと信じて活動しています。

ポール・ハラール師は1980年、鈴木俊隆老師の後を継いだ第2代サンフランシスコ禅センターの住職でありましたリチャード・ベイカー老師によって曹洞宗の僧侶になる儀式を行っています。ベイカー老師から龍心禅道という名前をもらっています。1993年には同じ法の流れをくむメル・ワイツマン師から嗣法(しほう、法統を嗣続すること)しています。サンフランシスコ禅センターに福祉活動を取り入れています。住職もしていました。2000年から北アイルランド、ベルファーストのブラック・マウンテン禅センターの指導者も務めています。

マイケル・オキーフ師は1986年、禅を学び始めています。仏教に入って行った動機の一つはアメリカのビート・ジェネレーションを代表する、作家・詩人でありましたジャック・ケルアック(1922-1969)⁵⁾や詩人のアレン・ギンズバーグ(1926-1997)⁶⁾の影響によるものがあります。音楽奏者であった友人のジョン・ミラーに連れられてニュー・ヨークの禅コミュニティで坐禅を行っています。31歳の時でした。その禅コミュニティの住職はバーニー・グラスマン老師でした。グラスマン老師は前角博雄老師の法を継いでいます。その後ピーター・マシセン(1927-2014)⁷⁾の導きによって摂心を行っています。

映画俳優のマイケル・オキーフ師は長年の親友であり、共に禅の修行をしているハラール師にこう言いました。「曹洞禅は何十年も派閥抗争が続いている社会に何か大切なことを提示するかもしれない。」

北アイルランドは日本では主として激しい、宗教的な衝突の場所として知られていますが、小さな曹洞禅グループが形成され、活躍しています。彼らは二つの闘争グループ、アイルランドのカトリック地域社会と英国プロテスタント地域社会から以前は戦闘員であった人々を呼び集め、二つのグループの違いの克服を促進するために道元禅師の教えを用いることから始めています。

ポール・ハラール師、マイケル・オキーフ師達は二つのグループの人達がどのように苦しんだのかを尋ねました。なぜならば仏教の基本的な教えは苦しみを扱う(処理する)ことにあるからです。お互いに殺さずにはすまないほど敵対した(している)彼らの多くは依然として同じ

部屋と一緒にいたくありませんでした。その彼らを同じ部屋に招いたのです。

ハラー師達は二つのグループのお互いの意見を聞きました。お互いがどのように苦しんだかを話して、お互いが共感するようになりました。そこに本当の進展があることがわかったのです。そこで禅グループが形成されました。このグループはお互いに戦いあった両方のグループの人々が集まって構成され、ベルファーストの中心に永久的な建物が確保されました。この新しいブラック・マウンティン・禅センターは北アイルランドの最初の曹洞禅グループになっています。

今、会員数も増え、スケジュールも忙しくなっています。心の傷やストレスを減らしていくための定期的な平和構築ワークショップを開いています。地域の労働者もこの活動に積極的に参加しています。年2回の禅の撰心会はアイルランド地方で開かれます。50人ほどの人々が参加しています。ベルファースト郊外の幾つかの町に新しい5つの禅グループが生まれています。

道元禅師が1227年中国から日本に帰国して曹洞禅を開きました。およそ800年後に世界の反対側で社会に深く根ざした衝突を克服するために道元禅師の教えが活用されると道元禅師は想像できたであらうでしょうか。しかしそのことは着実に起きています。北アイルランドのこれらのグループは強くそして簡素にお互いに曹洞禅グループと提携しています。なぜなら彼らはそれを一つの宗教としてより、瞑想の一方法と見ています。それはまさに道元禅師の教えです。

道元禅師の教えの心はどんな社会にも、どんな時にもつながり、価値を持っています。そして今、彼らが北アイルランドにもたらそうとしたのはこのことです。道元禅師の坐禅法を通して、自覚を実践し、瞬間を生きることは釈迦牟尼仏が教えていたことに気づくことであり、仏陀が教えられた生き方を自分で見出すことにほかなりません。(The Japan Times Saturday, June 27, 2009)

注

- 1) 成河智明（なりかわ ちみょう 1935（昭和10）年-2006（平成18）年）師は愛知県西尾市、曹洞宗長圓寺に生れています。北海道大学農学部修士課程修了。農水省に勤務されて 野菜、茶、米、麦の育種に従事され、1995（平成7）年定年退官される。1997（平成9）年 両本山に瑞世、長圓寺住職（三十二世）に任ぜられています。著書は『長圓寺双書 一 道元を求めて 一 正法眼蔵 二十 有時について』2003（平成15）年、『道元を求めて 二 正法眼蔵 三 佛性』2005（平成17）年、『道元を求めて 三 正法眼蔵 第一現成公案・二・七 第二摩訶般若波羅蜜 付 摩訶般若波羅蜜多心經 第七 一顆明珠』2006（平成18）年があります。2006（平成18）年に遷化されました。成河智明老師の弟、成河峰雄先生は名古屋工業大学を卒業後、本学の大学院で宗教学を学び、本学に勤めておられました。長圓寺住職（三十一世）でしたが、1995（平成7）年7月17日遷化されました。論文は「禅林における僧堂・寝堂出入法と賓礼」『佐藤匡

玄博士頌壽記念東洋学論集』(京都:朋友書店、1990、平成2年)等があります。

- 2) 『随喜稱名成佛決義三昧儀』 栖川興嚴大和尚 (1822、文政5-1889、明治22) は1876 (明治9) 年にこの書物を著しています。明治の激動の時代、曹洞宗自体の反省が促され、お釈迦様、お祖師様への報恩感謝こそ宗門のあり方であるということ为先哲方が自覚され、展開されていきました。そのなかでこの書が生れております。大野榮人教授がこの書物に和訳解説をしております。これは『曹洞宗日課聖典』(87-96頁) の中に収められている重要なお経です。
- 3) 愛知学院大学のこのキャンパスにはたくさんの桜が見られます。どの桜もすばらしいです。その中でも比較的早く咲くのが薄墨桜です。愛知学院には1992年に岐阜県の旧根尾村 (現在本巢市) から国の天然記念物に指定されている薄墨桜の苗木を二本寄贈していただいております。この根尾村の薄墨桜は樹齢1500年といわれ、1922年に国の天然記念物に指定されています。この薄墨桜は百周年記念講堂の正面の図書館側に一本と、その反対側に一本あります。木の根元に、白い札に根尾村と書いてありますが、22年たちますので字がうすくなっています。
- 4) エドウィン・アーノルド (Edwin Arnold, 1832-1904) はイギリスの詩人、ジャーナリストでした。ロンドン大学とオックスフォード大学に学び、大学を卒業後、インドのプーナにある官立サンスクリット語学校の校長として赴任しています。彼の代表作は『アジアの光』で大きな反響を呼びました。この作品は詩の形でお釈迦様の生涯を描いています。山本晃紹氏は日本語に翻訳しています。因みにアーノルド氏は1897年に日本人女性と結婚しています。(田中泰賢「エドウィン・アーノルド (Edwin Arnold, 1832-1904) の試作品『アジアの光り』(The light of Asia) について」『愛知学院大学 教養部紀要』第48巻第1号、2000 (平成12): 13-30 参照)
- 5) ジャック・ケルアック (Jack Kerouac) は「仏教に改宗したのは混乱と不安を引き起こす未解決の葛藤によって駆り立てられたことによっています。」(Ben Giomo: p. 89) と述べています。
- 6) アレン・ギンズバーグ (Allen Ginsberg) は1970年の夏、ニューヨークにおいて仏教僧、チョグヤム・トゥルンパに出会い、深い印象を受けて師と仰ぐようになりました。(Barry Miles: pp. 440-442)
- 7) ピーター・マシセン (Peter Mathiessen, 1927-2014) は2014年4月5日(土) ニューヨークに自宅で亡くなっています。作家、自然主義者、活動家であり、禅僧でもありました。坐禅を始めたきっかけは1969年、妻の紹介によるものでした。前角博雄老師 (1931-1995) とバーニー・グラスマン老師 (Bernie Glassman, 1939-) の下で坐禅を続けています。1989年嗣法しています。代表的な作品に『雪豹』(芹沢高志訳、ハヤカワ文庫) があります。

引用及び参考文献

青山俊重『道元禅師・典座教訓 すずやかに生きる』東京:大蔵出版、2001 (平成13) 年。

有福孝岳『道元の世界』大阪:大阪書籍、1985 (昭和60) 年。

粟谷良道編著『禅語録傍訳全書〔七〕正法眼蔵三百則』東京:四季社、2001 (平成13) 年。

“An Memoriam Rev. Master Jiyu-Kennett 1924-1996” *The Journal of the Order of Buddhist Contemplatives Special Memorial Issue* Volume 11, No. 4 & Volume 12, No. 1 Winter 1996/Spring 1997.

飯田利行『良寛詩集』東京:大法輪閣、1981 (昭和56) 年。

石井恭二『正法眼蔵の世界』東京:河出書房新社、2001 (平成13) 年。

石井清純監修・角田泰隆編『禅と林檎 スティーブ・ジョブズという生き方』京都:宮帯出版社、2012 (平成

24) 年。

伊藤秀憲『道元禪研究』東京：大蔵出版、1998（平成10）年。

伊藤秀憲・角田泰隆・石井修道〔訳注〕『原文対照現代語訳 道元禪師全集【第十四巻】語録』東京：春秋社、2007（平成19）年。

岩田慶治『道元との対話』東京：講談社、2000（平成12）年。

上田祖峯『新釈典座教訓 調理と禪の心』東京：圭文社、1983（昭和58）年。

ウォルター・アイザックソン『スティーブ・ジョブズ I・II』井口耕二訳、東京：講談社、2011（平成23）年。

内山興正『人生料理の本 典座教訓にまなぶ』東京：曹洞宗宗務庁、1975（昭和55）年。

大久保道舟『道元禪師全集』上・下巻、京都：臨川書店、1989（平成元）年。

大野栄人『随喜稱名成佛決義抄釋』大阪市：妙寿寺、1985（昭和60）年。

大場南北『道元禪師和歌集新釈』東京：中山書房、2005（平成17）年。

大場南北『道元禪師 傘松道詠の研究』東京：中山書房仏書林、2005（平成17）年。

大山興隆『草の葉 道元禪師和歌集』東京：曹洞宗宗務庁、1971（昭和46）年。

小倉玄照『新普勸坐禅儀講話』誠信書房、1991（平成3）年。

小倉玄照『修証義のことば』東京：誠信書房、2003（平成15）年。

鏡島元隆〔訳注〕『原文対照現代語訳 道元禪師全集【第十三巻】永平広録4 永平語録』東京：春秋社、2000（平成12）年。

加藤宗厚編『正法眼蔵要語索引』上・下巻、東京：理想社、1962（昭和37）年。

鎌谷仙龍『正法眼蔵身心学道』鳥取：大樹寺 山水経閣、1977（昭和52）年。

鎌谷仙龍『正法眼蔵袈裟功德』愛知：津島市、海善寺・吉田恵俊、1976（昭和51）年。

川端康成『美しい日本の私 その序説 サイデンステッカー=英訳』東京：講談社、1969（昭和44）年。

川端康成『川端康成全集』第28巻、東京：新潮社、1982（昭和57）年。

川端康成『川端康成全集』第33巻、東京：新潮社、1982（昭和57）年。

Giampo, Ben. Kerouac, *The Word and The Way Prose Artist as Spiritual Quester*. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 2000.

小坂機融・晴山俊英・岩永正晴・角田泰隆・伊藤秀憲〔訳注〕『原文対照現代語訳 道元禪師全集【第十五巻】清規・戒法・嗣書』東京：春秋社、2013（平成25）年。

駒澤大学内禅学大辞典編纂所編『禅学大辞典上巻・下巻』大修館書店、1978（昭和53）年。

“30th Anniversary Celebrations” Throssel Hole Buddhist Abbey, 10th August 2002.

“Zen Buddhist monk aids peace efforts in native Belfast” *The Japan Times*, Saturday, June 27, 2009.

『佐藤匡玄博士頌壽記念東洋学論集』京都：朋友書店、1990（平成2）年。

佐藤亨『北アイルランドのインターフェイス』東京：水声社、2014（平成26）年。

佐橋法龍『改訂増補 禅語小辞典』長野市：長国寺、1997（平成9）年。

菅原研州『道元禪師伝』曹洞宗宗務庁、2011（平成23）年。

Snyder, Gary. *Mountains and Rivers Without End*. Washington, D.C.: Counterpoint, 1996.

スナイダー、ゲイリー『野性の実践』重松宗育・原成吉訳、東京：東京書籍、1994（平成6）年。

スナイダー、ゲイリー『惑星の未来を想像する者達へ』山里勝巳・田中泰賢・赤嶺玲子訳、東京：山と溪谷社、2000（平成12）年。

- 『曹洞宗日課聖典』東京：鴻盟社、1996（平成8）年。
- 『曹洞宗報』6月号（921号）2012（平成24）年。
- 多田稔『仏教東漸—太平洋を渡った仏教』京都：禅文化研究所、1990（平成2）年。
- 辻口雄一郎『正法眼蔵の思想的研究』東京：北樹出版、2012（平成24）年。
- 高橋文二・角田泰隆・石井清純〔訳註〕『原文対照現代語訳 道元禅師全集【第十七巻】法語・歌頌等』東京：春秋社、2010（平成22）年。
- 田島毓堂『正法眼蔵の國語學的研究』東京：笠間書院、1977（昭和52）年。
- 立松和平『道元の月』東京：祥伝社、2002（平成14）年。
- 田中泰賢『ゲイリー・スナイダーの愛語』東京：英潮社、1992（平成4）年。
- 田中泰賢『アメリカ現代詩の愛語—スナイダー／ギンズバーグ／ステイーヴンズ—』東京：英宝社、1998（平成10）年。
- 田中泰賢「エドウィン・アーノルド（Edwin Arnold, 1832-1904）の詩作品『アジアの光』（The Light of Asia）について」『愛知学院大学教養部紀要』第48巻第1号（2000）：13-30。
- Tanaka, Hiroyoshi Taiken（田中泰賢）『Buddhism in Some American Poets—Dickinson, Williams, Stevens and Snyder』東京：Yushodo（雄松堂）、2008。
- 田中泰賢訳「故ダイズイ・マックフィラミー師（英国、前禅仏教会会長）著「カルマ（業）とは何か」」『愛知学院大学教養部紀要』第61巻第2号（2013）：45-64。
- “Tenth Anniversary of the Death of Our Founder Reverend Master Jiyu—Kennett” *The Journal of the Order of Buddhist Contemplatives* Volume 21, No. 3 Autumn 2006.
- 東郷豊治『良寛歌集』大阪：創元社、1963（昭和61）年。
- 藤堂明保編『学研漢和大辞典』東京：学習研究社、1980（昭和55）年。
- 中根環堂『典座教訓現代講話』東京：鴻盟社、1956（昭和31）年。
- 中本環『良寛の心』名古屋：KTC中央出版、1997（平成9）年。
- 中村璋八編『給食倫理』東京：第一出版、1977（昭和52）年。
- 中村璋八・石川力山・中村信幸『作る心食べる心 典座教訓・赴粥飯法・正法眼蔵示庫院文』東京：第一出版、1980（昭和55）年。
- 中村璋八・石川力山・中村信幸『典座教訓・赴粥飯法』東京：講談社、2009（平成24）年。
- 中村宗一他訳『全訳 正法眼蔵』巻一、東京：誠信書房、1971（昭和54）年。
- 中村宗一他訳『全訳 正法眼蔵』巻二、東京：誠信書房、1978（昭和53）年。
- 中村宗一他訳『全訳 正法眼蔵』巻三、東京：誠信書房、1975（昭和50）年。
- 中村宗一他訳『全訳 正法眼蔵』巻四、東京：誠信書房、1977（昭和52）年。
- 中村元『仏教語大辞典 上巻・下巻』東京：東京書籍、1975（昭和50）年。
- 成河智明『道元を求めて 正法眼蔵二十 有時について』愛知、西尾市：長圓寺、2003（平成15）年。
- 成河智明『道元を求めて 正法眼蔵 現成公案二つについて』愛知、西尾市：長圓寺。
- 新本豊三『道元禅の研究』東京：山喜房仏書林、1986（昭和61）年。
- 『日本国語大辞典 第二版』東京：小学館、2006（平成18）年。
- 『日本文学研究資料双書 川端康成』東京：有精堂、1986（昭和61）年。
- 橋本恵光『普勧坐禅儀の話』鳥取：大樹寺山水経閣、1977（昭和52）年。
- 服部敏良『仏教經典を中心とした釈迦の医学』名古屋：黎明書房、1982（昭和57）年。

東佐與子『愛の料理集』東京：厚徳社、1949（昭和24）年。

東佐與子『世界人は如何に食べつつあるか—各国比較調理術』東京：柏書房、1975（昭和50）年。

藤井宗哲『道元「典座教訓」 禪の食事と心』東京：角川学芸出版、2009（平成24）年。

船岡誠『道元—道は無窮なり—』京都：ミネルヴァ書房、2014（平成26）年。

Feldman, Burton. *The Nobel Prize A History of Genius, Controversy, and Prestige*. New York: Arcade Publishing, 2000.

Miles, Barry. *Ginsberg A Biography*. New York: Simon and Schuster, 1989.

松本章男『道元の和歌 春は花 夏ホトトギス』東京：中央公論社、2005（平成17）年。

『精進 京の四季の味わいと禪の心』京都：朝日新聞京都支局、1981（昭和56）年。

横井雄峯『日英禪語辞典』東京：山喜房仏書林、1991（平成3）年。

吉田道興『道元禪師伝記資料集成』名古屋：あるむ、2014（平成26）年。

読売新聞編集局 編『ノーベル賞10人の日本人 創造の瞬間』東京：中央公論社、2001（平成13）年。

頼住光子『道元』東京：日本放送出版協会、2005（平成17）年。

*これは平成26年度（2014年）愛知学院大学秋季公開講座で「道元禪師—グローバルの視点から」（10月18日）と題してお話したものを加筆修正したものです。